

副詞「たいそう」の変遷

—— 近代語を中心に ——

市村太郎

1 はじめに

副詞「たいそう」は、飛田・浅田（1994）によれば、現代では、「かなり古風」で、古典の現代語訳や昔話に用いられる、あるいは「公式の発言」で用いられる（p.254）とされる。前者については次のような例を指す⁽¹⁾。

（1） その筒の中を見ると三寸ばかりの人が、たいそうかわいらしい姿でそこにいる。
（『竹取物語』日本古典文学全集 現代語訳）

しかし、このように主に文体的な面での説明はなされるものの、その意味・機能については、十分に明らかになっていないようである。

現代語の状況を検討すると、（2）のような、話者自身の状態についていう場合には用いられず、他についての伝聞的情報を強調する（3）や（4）のような場合に用いられる。

（2）*私はたいそう空腹だ。食事をとりたい。

（3） 彼はたいそうお金に困っているようだ。

（4） 先生は若いころたいそう苦勞なさったようだ。

この点、程度副詞のなかでは、「だいぶ」「たしょう」「ずいぶん」などのように、渡辺（2002）で言うところの「ひとごと」系副詞とみられる。

なお、（5）のような比較構文で用いられることは少なく、また量副詞としての用法もない。この点では「だいぶ」「たしょう」の類とは異なっている（市村2011参照）。

（5）?今日は昨日よりたいそう晴れているようだ。

本稿では、いかにしてこのような現代の状況に至ったのか、程度・強調を表す副詞類の流れを追う一端として、「たいそう」の史的状況を明らかにし、その変遷過程を検討する。

2 副詞「たいそう」の確立

2.1 中世語資料・近世上方語資料

「たいそう」という語は、古くは中世語資料から見られる。

（6） Taisō. 1, Taisōna タイサウ. または、タイサウナ（大相. または、大相な）
Vōqina catachi. (大きな相) 大きな (ついえ)、または、多額の費用を要する (仕事)
（『邦訳日葡辞書』1603-1604）

- (7) あまたの人は善人のご遺骨以下を拝むために所々をめぐり、そのご作業を聞いておどろき、大さうなる堂寺を巡って、

(『コンテムツスマンヂ』Ⅳ ローマ字本 1596)

『日葡辞書』の記述や(7)の例から、大規模であるさまを表す形容動詞用法があったことがうかがえる。ただし上記以外の、抄物・天草版平家物語・エソポノハブラス・虎明本狂言等の中世語の主要資料からは例を得られておらず、実態を把握するのは難しい。

近世の上方語資料においても、井原西鶴や近松門左衛門の作品や仮名草子類、『難波鉦』、『醒醉笑』『きのふはけふの物語』等の咄本等、主要なものからは例が得られず、また心学道話においても『松翁道話』に1例得たのみであり、近世上方語の「たいそう」の状況をうかがうのは難しいが、中世と同じく形容動詞として用いられていたと見られる。

- (8) いやおれじゃ家主じゃ。ヲ、其家主合点じゃ。夜夜半迄家賃の催促。夜が明次第詔の楊枝先へ渡し。錢受取て急度済す。おきるのが大さうな明日の事にと云つゝ、

(浄瑠璃『ひらかな盛衰記』1739 隼人→家主)

- (9) 敷居鴨居にくるひが来ると、大體大層なものぢやない、家を建直さにやならぬ。

(『松翁道話』第五篇 1864)

- (10) 月溪が病ぜひもなし。たゞ隠者ていになりて、刀自に飯かしがせ、心はます／＼奢りてあらく也、繪はもとの如くあらずも、高逸にて、價たかく云ともゆるさん。御所の御用、宮様のと云ことをやめたらば。又御用に手のまゝにとあらば、屏障・壁などの大さうなるものぞ、つかまつらんと云て、絹紙の一片に筆をかく、墨がきを専にしてあらば、又一家なるべし。

(『膽大小心録』九六 1808)

このように、中世語資料や近世上方語資料では、大がかりなさま、大仰なさまを、時にプラスの語感を表す形容動詞として用いられている。

また、浄瑠璃に次の「たいそう立て」の例があるが、これは「おおげさにする」ことを意味する奈良方言にみられる「たいそ立てる」(『日本方言大辞典』)にあたるものであろう。

- (11) 御家中もお出入も御新造のおこし入。だんじりの来る様に今や〜と手を請てまつ嫁君。すつほりぬけてコリヤどこへ。気に入ぬお方ならたいそう立てもらはぬがよいはいな。

(『出世握虎稚物語』1725 遊君月花)

なお文体面では、佐藤(1979)によると頼山陽の書簡でも使用が見られるとのことであるが、基本的には上例のように、口語性の強い語として用いられていたと見られる。

2.2 近世後期江戸語資料

中世語・近世上方語の資料にはあまり見られなかった「たいそう」は、近世後期江戸語の資料に多く見られるようになる。以下、各資料で得られた形態別の用例数を示す。

項目の「形容動詞」は、「一な」「一で」「一だ」「一らしい(成句的な例も含む)」など、明確に形容動詞とわかる例、「一に(連用)」に副詞的に連用修飾する例、「副詞」には「たいそう」単独で現れる例を表す。地の文に現れる場合には「(地)」で示した。

	形容動詞	一に（連用）	副詞	御一
『遊子方言』（1770頃）	3	0	0	0
『総籙』（1787）	1	0	0	0
『東海道中膝栗毛』（1801-09）	2（地1）	1	0	4
『浮世風呂』（1809-14）	9	2	0	0
『浮世床』（1813-14）	4	0	0	0
『東海道四谷怪談』（1825）	0	0	1	0
『仮名文章娘節用』（1831-34）	0	0	4	0
『春色梅兒誉美』（1832-33）	2	3	9	0
『春色辰巳園』（1833）	2	3	13	0
『伊呂波文庫』（1836-1872）	2	1	0	0
『英對暖語』（1838）	1（地1）	7	3	0
『夢酔独言』（1843）	4	2	3	0
『八笑人』（1849）	7	0	3	5
『春色恋廻染分解』（1860-1862）	2	1	3	0
合 計	39	20	39	9

この他、『八笑人』には次のように名詞として用いられている例が2例あった。

(12) 「あんまりたいそふをいふから、おゝかたこんな事だろうトおもつた。」

（三編下 左次郎→眼七）

上表の状況を見ると、1800年代初頭の洒落本・滑稽本では、副詞の例は見られず、基本的には形容動詞として用いられていたようである。連用修飾の例を見ると、状態語についてその程度の大きなさまを表しているが、形容動詞のもつ大仰なさまが色濃い。

(13) 「たけがてんつるてんで、袖はてへそうに大きい。」（『東海道中膝栗毛』北八→左平）

一方『東海道四谷怪談』以降の資料では「たいそう」単独による副詞用法が急増し、特に人情本では副詞または「に」を伴って連用修飾する用例が多数を占めている。そして(16)のように、「大仰なさま」を越え、より抽象的に、程度副詞化している例が見られる。

(14) 「大そうお申がよいくせに、にくらしい」（『春色梅兒誉美』長→丹次郎）

また、おなじ滑稽本でも、やや時代の下る『八笑人』では、次のように明確な副詞の例が見られることから、時代的な変化とみてよいだろう。

(15) 「なんと左次さん、たいそう廣いお座敷だのう。」（四編下 安波太郎→左次郎）

なお、現在のところ、程度副詞としての初出例は『古道大意』の次の例である。

(16) 此ノ世界ハ、大造（タイサウ）廣（ヒロ）ク大キイ事デ、国モ勿論（モチロン）タント有ル。（『古道大意』1812 『日本国語大辞典』でも初出例）

平田篤胤の使用例を江戸語の系譜に位置付けるのは難しいところであるが、少なくとも上方語では見られなかった例とは言えるであろう。

以上、「たいそう」は、近世上方語資料や1800年代初期の江戸語資料では形容動詞として使用されていたが、1800年代前半の特に人情本において、副詞として多用される状況がみられ、数量面でも、意味・用法面でも程度副詞として定着したと考えられる。

3 近代語における「たいそう」の盛衰

副詞「たいそう」は、2.3 で見た江戸語の状況を引き継ぎ、明治初期の資料で盛んに用いられている。松井(1977)は、近代語における、程度の甚だしさを表す副詞について、(1)～(6)期に分け、計量的に調査したものであるが、それによると、(2)期(1884年～1894年)の小説等の資料において、「頗る」や「大変」等を抑え、使用回数1位となっている。明治初中期を代表する副詞と言える。

3.1 近代初期における「たいそう」の意味・用法

以下、その意味用法と盛衰状況を見る。まず近代初期の辞書の記述を確認する。

(17) TAISŌ タイサウ 大壯 Great many, great deal, much, very, exceeding. — kane ga iru, cost a great deal of money. — fukai, very deep. — ōkina koye, a very loud voice, Syn. ŌKI, HANAHADA 【第3版(1886)では類語にTAIHENも】
(『和英語林集成』1867)

(18) たいーさ(ソ)う(副) [大相ノ字ト云、或ハ大層カ] 甚ダ多く。甚ダ勝レテ。イト。最モ。「一廣イ」一アル」
(『言海』1886)

まずこれらの記述を見て気付くのは、品詞情報についても用例についても、形容動詞の記述がないことである。もちろん他の資料では形容動詞の用例も引き続き見られるのであるが、主として副詞と認識されていたことがうかがえる。

また、『和英語林集成』では「much」、『言海』では「甚だ多く」と、量的な意味の記述がなされている点が注目される。

確かに用例には、わずかではあるが、量的な多さ、または量的な規模の大きさを表しているとうかがえるものもある。どの程度数量的な意識があったのかは不明だが、非常に広い意味で使用されていたようである。

(19) Ano toki ni wa kega-ninga taisō atta sōdes! (『会話篇』52 1873)

程度副詞としての用法を見ると、抽象的な程度副詞でありながら「大仰さや驚きを背景としながら、他についての状態を強調して伝える」という性質がうかがえる。

(20) 伴「たいそう眞暗ですネー。勇「まだ夜が明けきらねへからだ
(『怪談牡丹灯籠』第八回 1884 友蔵→勇斎)

(21) 「何処で大層大砲が鳴てソシテ喇叭の音が聞え升が何事ですかネ。
(『雪中梅』発端 1886)

(22) 官吏の俸給の少ない所の国は大層官吏が立派ななりをするは何かと云へば賄賂苞苴で立派な暮らしをして居る (第4回貴族院第6号 1892年12月16日 箕作麟祥)

(23) 「私も腹が立つて堪りませんから其の通り御嬢さんに話しますと、御嬢さんは

大層御心配の御様子で御座いました。（『雪中梅』第七回 1886 下女お松→国野）

(22) のように既に定まった一般性をもつ事柄や、(23) のような回想的な例でも用いられるのであるが、特に現代と異なることとして、上の (20) (21) の例のように、その場で気付いたことについて、驚きをもって強調するという例が多く見られる点がある。この点は次のような、[相手の状況に対する気付き] の用例で顕著である。

(24) 時計を質に取られて。逆にも逆られず、さればといつて。今さらに改まつて。

怒る訳にもいかずと。殆ど思案に困じて。当惑して居る。「アレサ貴方。大層

ふさぐじやアありませんか。」（『当世書生気質』第二回 1885-86 娘→須河）

なお、文体的な面では、文語ではみられず口語文が主であるものの、文体的に硬質な語として用いられている場合もある。次の例では、『怪談牡丹灯籠』の飯島や『小公子』（1891）の侯爵のような最上位者が、下位者に対して単なる硬い語として用いていると見られる。

(25) ナニ国が預り中で、大層心配をするから一寸検めるのだ。（飯島→お国）

(26) 「貴様は、お袋を大層、好きだと思つて居るのだらうな。」（侯爵→セドリック）

また、尊重したい相手の状態・行動に用いる例もみられる。「たいそう」のもつ、漢語としての硬さと、他についての強調的語感を生かした使用と言えるだろう。

(27) 「どうもマア思がけない。實（まこと）に夢のやうな事でございます。そうして

大層立派にお成りだ。」（『怪談牡丹灯籠』第二十回 りゑ→孝助）

(28) 緒方先生が急病で大層吐血したといふ急使に（『福翁自伝』1899 攘夷論）

3.2 「たいそう」の衰退と「たいへん」の浸透

このように口語文において幅広く用いられていた「たいそう」だが、多用されていた割には、比較的短期間で衰退したようである。松井（1977）によると、小説口語文での使用順位は、(3) 期（1895～1909）には「非常に」等に抜かれ、(4) 期（1910～1922）には急落している。それについて松井（1977）は「たいへん」におされたことを示唆し、用例数上も、明治（3）期にはすでに「たいへん」が「たいそう」に勝る状況が示されている。また、「たいそう」が改まり語として用いられていて、「たいへん」が小説では若い使用者が用いている点を挙げている。（pp.750-752）

両語は、意味的にも、また漢語である点も非常に近く、松井（1977）において数値上「たいそう」と入れ替わる形で使用数が上昇している点からも、関連は大きいとみられる。

これに関して、まず改まり語としての状況を、帝国議会速記録の例で確認する。

今回の調査では、第1回～第5回（明治23～26年）帝国議会、衆議院・貴族院本会議より、各回につき両院の速記録から5号、計50号を抽出し、「たいそう」「たいへん」の用例を調査した。結果は次表の通りである。なお（ ）内は異なりの話者数である。

	副詞	—に	形容動詞	—の	計
たいそう	27 (17)	0	7 (7)	3 (3)	37
たいへん	47 (27)	19 (15)	21 (13)	5 (4)	93

これを見ると、既に「たいへん」は「たいそう」よりも多く使用されている状況がうかがえる。「たいへん」は改まった場でも数多く用いられているのである。

個別に検討してみると、調査範囲内では、例えば加藤弘之や尾崎三良は、「たいへん」のみを用いて、「たいそう」は用いていない。一方で「たいそう」(副詞)は箕作麟祥(生年: 1846 出身地: 江戸)若尾逸平(1821 甲斐)高梨哲四郎(1843 江戸)らがよく用いる。

- (29) 検査規則と云ふものはどうか工夫して変へねば行けませんまい、そこで変へるのには**大変**に金が掛るやうなことが出来る、今日本全国に四五箇所ある位である、夫れであるから**大変**不便なことである、夫れで人民に便利なやうに改革して人民の便利を与へるやうにして検査を行ったら**大変**金が要ると云ふ先達でも通信大臣の話もありましたけれども

(第2回貴族院第10号 1891年12月11日 加藤弘之 1836 但馬)

- (30) 仮令何れの国の人と雖も我国内に這入った以上は我国の法権に従ふと云ふことが確然立たぬ以上は**大変**危いであります、

(第1回貴族院第5号 1890年12月19日 尾崎三良 1842 京都)

- (31) それから**大層**諸君が感動を起したのは血の刀を持って居るに、其取調をしないと云ふこと、又議員が此事に付いて一言もしないと云ふのは此議院は卑屈である、

(衆議院第5号 1892年5月12日3回 高梨哲四郎 1843 江戸)

これらを見ると、必ずしも年齢が高いものが「たいそう」、若い者が「たいへん」を使うというわけではなさそうである。むしろ、注目されるのは、使用者の経歴である。上の状況では「たいそう」を用いているのは江戸近隣出身者であり、加藤弘之や尾崎三良などの西国出身者が「たいへん」を用いているのである。先に「たいそう」の成立過程において程度副詞として上方語で用いられていないことを指摘したが、「たいへん」が程度副詞となると、「たいそう」を用いない人々に比較的改まった場面で用いられる漢語副詞として浸透したのではないかということも、ひとつの可能性としてはありうる。『日本方言大辞典』によれば、「たいそう」は主に北陸以西の広い地域で、「疲れて苦しいこと」や「気の進まぬこと」「おっくう」などの意で用いられており、それを伺わせる⁽²⁾。

「たいへん」は、『日本国語大辞典』第二版では、副詞の例は二葉亭四迷の『浮雲』を初出とし、松井(1977)では「たいへん」が(2)期では「会話文、流行語の様相」とあるが、以上のように帝国議会の議事録を見ると、すでに改まった語としても用いられており、「たいそう」よりも多用される状況である。「たいへん」は、公式な発言でも多用されるという点において、当初から極めて広範な使用があったことが見て取れる。

チェンバレンの記述には、以下のようなものがある。

- (32) 217 very はハナハダ、イタッテ、タイソー(ニ)、タクサンなどの語で表わす。

タイヘン(ニ)という語は英口語の awfully に近く、始終用いられる、次に例を幾つか示す。○タイソー ニ キレイ Very pretty. ○タイヘン ニ オモシロー ゴザイマシタ It was awfully jolly.

(『日本語口語入門』第2版1888 日本語訳1999)

「たいへん」は口語性の強い語であった一方、改まった場面でも急速に浸透した。「始終用いられる」という点からも、使用の拡大が伺える。

このように、「たいそう」と「たいへん」は、副詞としての前後関係はあり、「たいそう」に硬さがあるものの、一方が改まり語で一方がより口語的であるという単純な対立的構図では、必ずしも捉えられないのである。小説口語文以前に、既に「改まり」の面でも「たいそう」に比べ「たいへん」の方が多用されていた。

ではなぜ短期間で「たいへん」の使用が拡大したのだろうか。それを検討するには、意味用法上の差違を考える必要がある。以下、明治初期で特に両語が多用される『小公子』で、用法上の差違を検討する。

『小公子』前篇において、副詞としての「たいそう」の使用例は全42例で、内27例が地の文での使用であった。会話文においてはその多くは松井(1977)の指摘するように、年長者からセドリックに対する発話であった。

一方、副詞「たいへん」については全33例で、内1例が地の文、1例が母→セドリック、1例がメレ→セドリックで、他はすべてセドリックの発話であった。

松井(1977)の通り、『小公子』で見える限りは年齢等が大きく影響していると見られるが、意味・用法という観点からみると、程度副詞の使用として明確な区別がある。

渡辺(2002)は、程度副詞の分類として「わがごと」「ひとごと」の別を挙げた。この観点で見ていくと、以下のように、「たいそう」では、「お城」「家」の描写に関わるものであり、また回想的・観察的な例が見られる。一方「たいへん」では、「大変好い靴磨き」のように、他に対する評価も表し得るが、「大変失望する」「大変嬉しい」のように、自らの感情なども表し得るのである。

【たいそう】

- (33) 「お城といふのは、大層美しい処だつて、とうさまが、よく話しをしなすつたつけよ。とうさんは、大層そこがお好きだつたが、おまへも、きつと好きになるよ。」(母→セドリック)
- (34) 「かあさん、これは大層きれいな家ですねい？」(セドリック→母)

【たいへん】

- (35) 「ヂツクといふのはね、靴磨人(くつみがき)で、さうして、大変好い靴磨人(くつみがき)なんです。」(セドリック→ハヴィシヤム)
- (36) 「かあさんが、僕にぼんへ飛ぶ綺麗な鞆買つて下さつてね、僕が持つて歩いてたら、馬車だの馬だのある通りの真中へ飛んでつちまつたでせう。だもんだから、僕が大変失望して、泣いてたんです…」(セドリック→ハヴィシヤム)
- (37) 「御機嫌は如何ですか、僕は今日あなたにお眼にかゝつて、大変嬉しいんです。」

(セドリック→ドリンコート侯爵)

一方『小公子』会話文中には、「(自分は) たいそう嬉しい」のような例はみられない。他の資料の例をみても、全く「わがこと」に用いないわけではないようだが、「たいそう 長座しました」[へりくだり、客観的な気付き]「八年以来お前の為に大層苦勞をして居るんだア」[尊大] (両例『怪談牡丹灯籠』) 等、わざわざ述べ立てる場合に偏るようである。

他方「たいへん」については「わがこと」について、少なくとも「たいそう」より積極的に表し得、他の資料からも例が得られる。

(38) 「僕の話は君の話と違つて大変にくだくだしいから」

(『当世書生気質』 第四回 小町田→守山)

(39) 「我々は大変之に反対である」 (第4回衆議院第4号 1892年12月5日 工藤行幹)

自らのさま、考えを表し得るということは、意見表明等のみならず、「大変幸に存ずる次第であります」(第89回帝国議会・貴族院予算委員会2号・1945年12月14日・中山太一) のように感謝等を表す文脈にも用いられ、会話上、また改まり語としても、大きな影響があると考えられる。渡辺(2002)において「わがこと」系とされるものには、「たいへん」「ひじょうに」「とても」等があり、また「すぐく」も該当すると考えられるが、現代において程度副詞として特に多用される語が該当する。

このような「ひとごと」のみか、「わがこと」まで表し得るかという意味・用法上の差違も、「たいそう」と「たいへん」の状況に影響を及ぼしたと見られる。

4 口語文での衰退後の「たいそう」

副詞「たいそう」は、松井(1977)や趙・祁(2010)の文学作品における状況によると、「大変」等の増加に比して、明治末以降、大正・昭和にかけて小説資料の口語文から姿を消していくとされるが、硬い文章語で用いられたわけでもない。「たいそう」はどこへ行ったのだろうか。それに対するひとつの答えとして、物語や昔話等の地の文が挙げられる。

先に『小公子』の状況について触れたが、『小公子』において「たいそう」は42例中27例と、非常に多く用いられている。次のような例である。

(40) おっかさんと自分との知人といふは、極く僅少で、人に云はせれば、大層淋しい生涯を送つてゐたのですが、

また、芥川龍之介の作品でもこのような「たいそう」の使用が見られる。同作内で「たいへん」の副詞としての使用はない。

(41) 若殿様でさえ、時々柿や栗を投げて御やりになったばかりか、侍の誰やらがこの猿を足蹴にした時などは、大層御立腹にもなったそうでございます。

(『地獄変』三)

(42) その頃、若殿様は大そう笙を御好みで、遠縁の従兄に御当りなさる中御門の少納言に、御弟子入をなすつていらっしやいました。

(『邪宗門』三)

[他について、驚きを含んでやや誇張的に強調して伝える] という表現機能は、このような回想的・伝聞的な地の文や、さらには回想・伝聞によって語られることの多い昔話的

な文章に利用されやすいものであったとみられる。

またその傾向が顕著なものとして国定国語教科書がある。『国定読本用語総覧』を基に作成した出現状況（下表）を見ると、1期に非常に多く出現し、そこから6期までの間では衰退状況がうかがえるのだが、2期～4期の間ではむしろ増加している状態で、他の資料での状況に比して「たいそう」が多用され続けているのである。

		1期 (1904)	2期 (1910)	3期 (1918)	4期 (1932)	5期 (1941)	6期 (1947)
たいそう	副	100 (会16手1)	22 (会5手1)	33 (会9手2)	36 (会5)	28 (会4手3)	8 (会3手1)
	形	2 (手1)	1	0	0	0	0
たいへん	副	0	0	6 (会3)	2 (会1手1)	6 (会4手1)	51 (会20手1)
	形	0	8 (会2手1)	4 (会1手1)	14 (会12)	14 (会8手1)	15 (会7)

※品詞は『国定読本用語総覧』に従い、「副」は副詞、「形」は形状詞（概ね本稿で形容動詞としているもの）を表す。「手」は手紙文、「会」は会話文を表す。なお2期にのみ、程度副詞的な「大変に」3例が形状詞に含まれている。

「たいそう」の用例の大半は地の文であって、神話や昔話、寓話の類に多く用いられている。教科書でこのように使用され続けたことが後世に与えた影響は大きいだろう。

(43) コノコロ、平清盛（タヒラノキヨモリ）トイフ人ナドガアッテ、たいそう、ワガママヲシテラツタノデ、オカミデモ、たいそう、コマツテキラッシャツタ。①

（数字は期数）

(44) モモタラウハダンダンオホキクナツテ、たいそうツヨクナリマシタ。②

(45) 北風の主人は若い騎兵中尉（ぬ）で、たいそう北風をかはいがつて、③

(46) ある日のこと、もとの方がたいそう光ってゐる竹を、一本見つけました。④

(47) 大國主神は、たいそうお喜びになって、少彦名神を、おうちへおつれになりました⑤

(48) わにぎめはそれをきくと、たいそうおこりました。⑥

なお「たいへん」については、6期において急激に副詞の使用数が増え、次のような「わがこと」の例も見られる。第6期ではより会話的教材が増えたこともあり、当時の発話の現状を踏まえて改訂がなされたと考えられる。

(49) すのおそうじをするので、はとをだいていたら、たいへんあついとおもいました。

(50) ひさしぶりにごちそうをたべて、たいへんゆかいです。

このように、副詞「たいそう」は、口語において「たいへん」が浸透し、次第に衰える一方、その表現機能を活かすことのできる昔話等の地の文で用いられ続けたことによ

で、現代の古典の訳等で生き続けているのである。

なお、現代の会話等で一切使用されないかというとして決してそうではない。「たいへん」等に比べ量的にははるかに少ないが、次のような場面で用いられている。

(51) の例は伝聞・回想的な情報を、やや大仰に述べ立てながら伝える場合である。近代と異なり、発話時の状況は「ほめ」(飛田・浅田1994 p.254では「評価の暗示」とする)以外でほとんど用いられないが、これは口頭での会話という瞬間的な場ではなく、物語等の地の文等で多く用いられ続けてきたためであろう。

(51) 特にそのときのことを思い出すと、あの雲仙、鳥原のときは、食事供与事業というのが被災者の方々に大層喜ばれました。

(154回衆議院厚生労働委員会9号 2002年4月17日 N議員)

また、副詞としてとくに皮肉な意味を持って述べ立てる場合、つまり「御大層」や「大層な」などの、形容動詞に近い意味として用いられる。

(52) 先生が御質問になった緑の国債というのは、名前は大層美しいんですが、国もいい、国債の購入者もいいという、両方うれしいという状況をつくれるのかと。

(171回参議院予算委員会14号 2009年3月16日 Y国務大臣)

その他、他人をほめあげる場合に用いられる。この場合では、必ずしも伝聞・回想的ではない。ここで、類義語「ずいぶん」と比べると、「たいそう」の方は手放してほめあげているのに対し、「ずいぶん」はなんらかの基準・比較が背景にあるため、手放しに誉めるという印象がない。このような文脈に於いては、「たいそう」の表現的効果が際立つのである。

(53) たいそう御活躍だとか。 (53') ずいぶんご活躍だとか。

(54) たいそう御立派になられて…。 (54') ずいぶんご立派になられて…。

以上のように、現代では、副詞としての「たいそう」は、近代にみられたような比較的抽象的な程度副詞としてではなく、むしろ「たいそう」の含むやや誇張的、大仰な述べ方が前面に出、それが生きるような場面に限定されて残っているといえる。

なお、形容動詞としては脈々と用いられており、近年(2001~2011)の国会議事録の用例を見ると、73例中43例が形容動詞であって、副詞よりも多用されている状況である。

5 まとめ

「たいそう」は、近世後期江戸の特に人情本等から程度副詞の例が見られ、以降近代初期にかけて、量・規模の大きさや、その場で気付いたことについても使用できるなど、他に対する誇張的強調を背景とし、比較的抽象的な程度副詞として広範に用いられた。

しかしながら、明治期には早くも「たいへん」等におさされ、次第に勢力を弱めた。主に「ひとごと」を表す「たいそう」に対して、「たいへん」は「わがこと」をも表し得、また漢語として改まり語としても急速に広まった。

ただその一方で「たいそう」はその「ひとごと」的性格や誇張的強調を背景として、昔話など、物語等の地の文との結びつきを強め、近代~現代に至る過程では国定国語教科書

で多く用いられた。このような状況が、古典文学の現代語訳や、回想的・伝聞的文脈での使用につながっていると考えられる。また、他について述べ立てる機能は、ほめや皮肉などでは効果的であり、会話においては、そのような限定された場面で存続している。

注

- (1) なお、同書で「公式の発言」として挙げられている「(客が) これはこれはいたいそう御馳走ですなえ。」(p.254) という形容動詞の例は、「公式」の例として適切かどうか疑問が残るが、文体的な硬さへの言及を意図しているものと思われる。
- (2) 近代初期、西日本で副詞としてあまり使用されていなかったと仮定すると、以後どのような形で受容され、残存していったのか気になるところである。これについては、国定国語教科書で採用されたことから、教育の影響が少なからずあると推測するが、現段階では詳細を知る用意がないため、今後の課題としたい。

【資料】

『竹取物語伊勢物語大和物語平中物語』（片桐洋一 福井貞助 高橋正治 清水好子 日本古典文学全集小学館 1972）／『邦訳日葡辞書』（土井忠生 森田武 長南実 1980）／『コンテムツスムンヂ』（小島幸枝『コンテムツスムンヂの研究 資料編』2009）／『ひらかな盛衰記』（『浄瑠璃集』上 乙葉弘 日本古典文学大系 岩波書店1960）／『松翁道話』（石川謙 岩波文庫1936）／『膽大小心録』（『上田秋成集』中村幸彦 日本古典文学大系1959）／『出世握虎稚物語』（鳥越文蔵監修 義太夫節正本刊行会編 義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集 1 玉川大学出版部2006）／『遊子方言』『総籙』（『黄表紙・洒落本集』水野稔 日本古典文学大系1958）／『東海道中膝栗毛』（麻生磯次 日本古典文学大系1958）／『浮世風呂』（中村通夫 日本古典文学大系1957）／『浮世床』（『洒落本滑稽本人情本』神保五彌 日本古典文学全集1971）／『東海道四谷怪談』（郡司正勝 新潮日本古典集成1981）／『仮名文章娘節用』（『人情本集』山口剛 日本名著全集1928）／『春色梅兒誉美』『春色辰巳園』（『春色梅兒誉美』中村幸彦 日本古典文学大系1962）／『春色恋廻染分解』（浅川哲也『人文学報』413・2009年 428・2010年 東京都立大学人文学部）／『正史實傳伊呂波文庫』（第五編十五まで 塚本哲三 有朋堂文庫1927）／『英對暖語』（『梅曆』下 古川久 岩波文庫1951）／『夢酔独言』（『勝海舟』江藤淳編 日本名著32 中央公論社1978）／『八笑人』（小池藤五郎 岩波文庫 1942）／『古道大意』（『平田篤胤全集』七 上田萬年 山本信哉 平田盛胤 1931）／『和英語林集成』（明治学院大学図書館『和英語林集成』デジタルアーカイブス』2006-2010 http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/index2_j.html）／大槻文彦『言海』ちくま学芸文庫 筑摩書房2004／『KUAIWAHEN』Ernest Satow (Kaiser, Stefan. The Western rediscovery of the Japanese language vol.5. Richmond:Curzon Press 1995)／『怪談牡丹燈籠』（『三遊亭円朝集』興津要 明治文学全集 筑摩書房1965）／『当世書生気質』（『坪内逍遙集』稲垣達郎 明治文学全集1962）／『雪中梅』（『明治政治小説集二』柳田泉 明治文学全集1967）／『福翁自伝』（佐志傳『福翁自伝』の研究 本文編 慶應義塾大学出版会2006）／『小公子』（前編 若松しづ子訳 岩波文庫1927）／『日本語口語入門』第2版 翻訳 付索引』（大久保恵子 笠間書院 1999）／『地獄変』（『地獄変・偷盗』新潮文庫1968）／『邪宗門』（『羅生門・鼻』新潮文庫 1968）／『日本教科書大系 近代編 6～9国語』三～五（海後宗臣1964 講談社）『国定読本用語総覧』1～12（国立国語研究所 三省堂1985～1997）／国立国会図書館「帝国議会会議録検索システム」（デジタル画像）<http://teikokugikai.ndl.go.jp/>／国会会議録検索システム <http://kokkai.ndl.go.jp/> ※『日本古典文

学大系』は国文学研究資料館のデータを併用。

【参考文献】

- 市村太郎（2011）「副詞『だいぶ』について—近世語を中心に—」『早稲田日本語研究』20
- 工藤 浩（1983）「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- 佐藤喜代治（1979）『日本の漢語 その源流と変遷』角川小辞典28 角川書店
- 高梨信博（1997）「国定読本の共通教材における用語の変化—四期・五期を中心に—」
- 佐藤喜代治編『国語論究 第6集 近代語の研究』明治書院
- 趙宏・祁福鼎（2010）「近代語の会話文における程度副詞の使用状況をめぐって—『高い程度を表す』副詞を中心に—」『明治大学日本文学』35
- 仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』新日本語文法選書3 くろしお出版
- 飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 松井栄一（1977）「近代口語文における程度副詞の消長—程度を甚だしさを表す場合—」松村明教授
還暦記念会編『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院
- 森田良行（1984）『基礎日本語3』角川小辞典8-2 角川書店
- 渡辺 実（2002）『国語意味論』塙書房
- 『日本国語大辞典』第二版 小学館2001
- 『日本方言大辞典』小学館1989

【付記】 本稿は、2011年12月3日に行われた早稲田大学国文学会秋季大会での口頭発表の内容に、
修正・加筆を施したものです。ご教示を賜りました方々に、心より感謝申し上げます。